

## 参考資料 1 桜川序

### 【原文】

蘭を千草の香のかみにをきさくらを諸木の  
花の王とす彼川其名におへり此集又其  
川の名にしおふ事只に故なかるへしや或人の  
いはく此川は彼嶺より落るとかよませ給ひし  
みなの川に濫觴してこゝになかれてそこい  
なき淵をなせり凡俳諧の連哥はいはゆる  
にみはりの言の葉に根さしはしめて連哥に  
枝をましへ筑波集の部の数に入ぬかくて麓の  
塵つもりゆく山崎の宗鑑か犬つくはに中興  
して猶世に盛の時至りける花さきの<sup>おきな</sup>翁か  
新增つくは集鷹筑波集此ひとつ口にいふへくは  
あらねと新続犬つくはなとこのもかのもの陰しけく  
世にきこゆめりされは彼風鈴軒のきみも此筑波  
のやま水のなかれをうけてかく桜川の名をつけ  
させ給へりとかやをいさりをいさりいと興ありけに  
浅からぬ故こそありけれ予はしめてこれを承  
りてつらつら椿つらつらにつらつえをつきつゝ  
おもひめくらし侍るに此さまざまなる犬鷹の名たゝ  
るつくははあれとそれはむかしへ中むかしへのひね  
たる風躰にして今のわさくさき匂ひは又こと  
なるへき物なりければ此集を撰ひあつめて  
彼おほむかしのあとをも忘れしめす當世風の  
意気をも世のすき人に見知しめん事を  
此集のもつつ心はへにてしかも彼花は梅に  
をくれ<sup>ぼたん</sup>牡丹にさいたちて咲比あたかも中を得たり  
彼川は又かの山高くかの水清き美景たくひ  
しなればかれこれの餘情をとりつくして花実  
相對の風雅のまつたゝ中を顕す所の名成へし  
誠に山したゝりの細う長うすゑのなかれ廣う  
遠う傳はらんとつとの後のゝちの世々にもうつ  
かりひよんなおもひをなす事なかれ予に仰せて  
序つくらしめ給ふに、例の心よはくうけひき  
侍しあさてかたはらいたきにあらずや

寛文十二年正月三日洛下<sup>きぎん</sup>季吟書

## 【現代語訳】

香りでは蘭が一番、そして、花では桜が一番とされている。

あの桜川という川は、その名に桜を冠し、俳諧選句集『桜川』は、その川の名を句集に冠している。これはたまたまそうなのではない。

桜川は「筑波嶺の峰より落つる男女川恋ぞつもりて淵となりぬる」と詠まれた男女川の末流で、底の深い淵を持つ。

俳諧の連歌は新しい言葉を生み出し、それに根を張って、連歌の世界に枝を伸ばし、『筑波集』ができあがった。

そして、山崎宗鑑が『犬筑波集』を作り、盛りの時を迎えた。

また、花咲きの翁、松永貞徳が『新增筑波集』や『鷹筑波集』、また、ひと口で言うのがよいのか、どうかかわからないが、『新続犬筑波集』などを作り、それら世に出し、高い評価を受けた。

それゆえ、風鈴軒（内藤義概）も筑波の山の水の流れを汲み、この俳諧選句集に『桜川』という名を付けられたのだろうと思う。

なるほど、なるほど、とても深い謂われがあるのだ。

このことを初めて聞いた時、私は頬杖を突きながら、深く、深く、そして、どこまでも、どこまでも考えを巡らせた。

『犬筑波集』や『鷹筑波集』などの素晴らしい作品集はあるが、そこに収められているのは昔の、もしくは、少し昔のこなれない作品であり、現在の作品とは趣きが異なる。

そこで、遠い昔の作風を忘れることなく、また、同時に、現在の作品の趣きを世の人々に知らせたいというのが俳諧選句集『桜川』を作るそもそもの狙いである。

そういえば、桜は梅よりも遅く、牡丹よりも早く、つまり、梅と牡丹の間の頃合いに咲く花である。

また、桜川は高峰、筑波山に生じ、水も清く、この上なく美しい景色を見せてくれる。

花も、実もあり、それぞれに趣きがある。『桜川』という書名はまさにそういうものなのだ。

山から滴り落ちた水が細く、長く、また、その流れが広く、遠く、伝わることを願う。

この後も、ずっと、これらのことを忘れずに、保ち続けて欲しい。

序文を書けと私に依頼があり、気弱な私はそれを断れず、引き受けた。

この文章が的外れの、読むに耐えないものになっていなければよいのだが…。

寛文十二（一六七二）年正月三日 京都にて 北村季吟 書

## 【語句の解説】

筑波嶺の峰より落つる男女川恋ぞつもりて淵となりぬる：作者は陽成院（貞観十（八六八）年～天曆三（九四九）年）。百人一首の歌の一つ。二つの峰からなる筑波山は古くから恋の歌の題材になっている。陽成院の歌は「筑波山から流れ出る男女川もはじめは小さな流れだ

が、次第に大きく、深い流れになる。あなたを思う私の思いも、いつしか深い淵になっている」の意味。筑波嶺（山）は茨城県にある山。男女川は筑波山から流れ出て、桜川に合流し、霞ヶ浦にいたる川。

『筑波集』：『菟玖波集』とも書く。二条良基らが選集、編纂した連歌集。正平十一（一三五六）年に成立。二十巻からなり、二千百九十句を所収する。古い時代の連歌も所収され、連歌の歴史を辿ることもできる。また、この連歌集によって、連歌が和歌から独立し、独自の地位を占めるようになった。二条良基、救済、尊胤親王、導誉、足利尊氏などの句が収められている。

<sup>そうかん</sup>山崎宗鑑：室町後期の連歌師、俳人。近江の人。將軍、足利義尚に仕えたが、後に出家し、山城国の山崎に暮らしたという。『新撰犬筑波集』を編纂した。荒木田守武とともに俳諧の祖といわれる。生没年不詳。

『犬筑波集』：天文年間（一五三二～一五五五）、山崎宗鑑によって編纂された俳諧の連歌集。写本では『誹諧連歌』『誹諧連歌抄』との書名が用いられているが、江戸時代に出版された版本では書名が『新撰犬筑波集』となっており、現在では『犬筑波集』と通称されている。四季、恋、雑の発句と付句からなる。大部分の句の作者は不明だが、宗祇、守武、宗鑑などの句がある。作風は自由奔放で、哄笑に満ち、俳諧談林派に大きな影響を与えた。

<sup>おきな</sup>花咲きの翁：松永貞徳のこと。貞徳は戦国時代から江戸時代前期の国学者、俳人。京都生まれ。名は勝熊、号に長頭丸、逍遙軒、延陀丸などがある。細川幽齋、里村紹巴などに和歌や連歌を学び、林羅山などとも交友があった。また、俳諧の確立にも大きく貢献し、北村季吟<sup>きぎん</sup>、雛屋立圃などの門下を育て、俳諧貞門派を形成した。山崎宗鑑、荒木田守武とともに俳諧三神と称される。承応二（一六五三）年、八十三歳で没した。

『新增筑波集』：『新增犬筑波集』のこと。江戸時代初期の寛永二十（一六四三）年に出版された俳諧論集。松永貞徳著。

<sup>たかつくぼしゅう</sup>『鷹筑波集』：寛永十九（一六四二）年に出版された俳諧撰句集。松永貞徳が関わった発句、付句を西武に編集させ、句集とした。松永貞徳が序文を書いている。全五巻。俳諧貞門派、三百余名の俳人の句が所収されている。

『新続犬筑波集』：万治三（一六六〇）年に出版された俳諧選句集。北村季吟<sup>きぎん</sup>編。

<sup>きぎん</sup>北村季吟：寛永元（一六二五）年、近江国野洲に生まれ。医学を修める一方、安原貞室、松永貞徳らに俳諧を学び、俳諧貞門派の俳人として活躍、頭角を現した。また、飛鳥井雅章、清水谷実業に和歌や歌学を学び、『土佐日記抄』『伊勢物語拾穂抄』『源氏物語湖月抄』を著わした。歌学方として、江戸幕府に仕えた。宝永二（一七〇五）年、没した。慮庵、呂庵、七松子、拾穂軒、湖月亭などの号を持つ。